山とスキー

第五十四號

札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十四年十月三十日印刷納本

大正十四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第五十四號目次

記事

國際スキー競技の採點方法とその變遷について　廣田戸七郎〔一〕
メンバーシップ　赤松動〔一三〕
スキー材と雪と蠟とに就いて　岡村源太郎〔一九〕
スキー蠟に關して　小森太郎譯〔二五〕
冬を待つ（各地よりのスキーだより）〔二九〕
湖の旅　館脇操〔三一〕
彙報抄錄
〔一九二五年度全日本スキー聯盟會議〕
〔近代的二つのスキー權威書〕その他

寫眞版

十勝岳附近　板橋敬一
ブリタニアン・ヒユツテ（リンプシユホルン）

大正十四年十一月發行

十勝岳附近

板橋敬一

國際スキー競技の採點方法と其變遷について

廣田戸七郎

國際スキー競技とノールウエースキー競技

國際スキー競技とは如何なる規定によりて行はれ、如何なる種目が實施せられ、現在如何なる採點方法によつて開かれて居るものであるかについては、已に、嘗て本誌並びにアサヒスポーツ紙上に於ても論述せられたことで、而も未だ吾人の記憶に新なものである。夫れ故、或は私が是より記述せんとすることで、夫等の人々の論記せるところに重複を免れぬかも知れぬが、可及的私はその重複を避けて競技方法の實際的方面即ち競技審判上の採點方法並びにその過去より現在に到るまでの變遷と、更に採用せらるる採點樣式の如何なるものなるかにつきて、些か卑見を述べて見たいと思ふのである。

國際スキー競技なる名稱の下に行はれたるスキー競技は可成り以前から北歐、南歐の諸國に於て實現せられて居つたことではあるが、全國的に各國の代表者が集合して、合議の結果統一的に國際競技の施行せられたのは、實に一九二四年シヤムニーに於て開催せられたる國際スキー聯盟主催のスキー競技を以て第一回となすものである。

而して國際スキー聯盟は、其聯盟組織の提唱者がノールウエー、スウエデンであつた故か、聯盟規定の殆んど凡べてが已にノールウエースキークラブに於て制定せられてあつた規定に則つて居ることを吾人は容易に知るのである。實際其時までに已に、ノールウエーのスキー競技は世界の指標として恥ぢざるまでに進歩し、競技規定も世界の何れの國のスキー

競技規定を以てしてもノールウエーのもの程精密で、しかも合理的でなかつたから聯盟規定採用の規準を之に置いたのも理の當然なものと云ふべきである。

然らばノールウエースキークラブのスキー競技規定は何時の時代に編成せられ、如何なる内容を有するものなるか、と云ふに今此處で是を述ぶることは些か私の論點を遠ざかる樣であるから、たゞ私はその規定中にあるスキー競技とその審判によつて決定を見る競技價値の數理的表し方につきて述べやうと思ふのである。

國際スキー競技規定を見ると競技種目には

1. Cambined Competition, Consisting of jumping and distance-race.
2. Competition of Greater distance
3. Jumping Competition.
4. Long distance.

の四種目があり、そして夫等競技決定方法即ち競技採點方法は、凡べてノールウエースキークラブのものと同一で審判表の點も亦全く同じことを知るのである。

今ノールウエースキー競技規定の一端を伺ふて、國際競技の夫れとの相違する點同一なる點を述べて行かう。

先づ競技種目より見るに、ノールウエースキークラブの規定するところは、競技種目を大體ジャムピング競技とディスタンスレースとの二種目にして之を次の如き分類によつて競技者を制限して居るのである。

A 普通競技

ジャムプ及びディスタンスレースよりなる復合競技である。そこでこの場合のディスタンスは、最短一五KM、最長二〇KMたるべきこと。

參加者は競技開催年度の一月一日以前に滿二〇才たるべきこと。而して參加者は二級(クラス)に分たるものとす。

第一クラス

スキー競技者は、嘗て自國の國際競技又はホルメンコーレン即ち大國際競技に於ける復合競技に出場して入賞せし經驗を有する者。

第二クラス

上述の如き入賞經驗なきスキーランナアを含む。

B特殊競技

1. 三〇又は五〇KMの最大長距離競走

2. 三二才以上のスキーランナアのジャムピング競技

3. 一八才及び一九才のスキーランナアのジャムピング競技

即ち競技種目及び參加者制限の方法から云ふと、形式的に國際スキー聯盟の規定とノールウエースキークラブのそれとには相違する點がある樣だが内容に於ては大差なきを知るのである。即ち一例をあぐれば、ノルーウエーの規定にあつては、凡べて二〇才以上—三二才以下のスキーランナアの競技は、之を第一、第二級(クラス)に分ちて、共に復合競技としてはあるが、國際の規定では復合競技は別にクラス別制をとらず復合競技を一種に限り、別にロングディスタンスの種目を作つて居る。而してロングディスタンス出場者は滿十八才以上たるべき事を規定して居るに過ぎないのである。要するに差違と云へばノールウエーの規定では滿二〇才にならざればロングディスタンスレースのみのレースに參加することが出來ぬが國際の規定では滿十八才のスキーランナアでもロングディスタンスレースに參加し得ると云ふ譯である。この參加者年齢の相違は何れの點から斯樣にきめたものか輕卒な推測は出來ないが、恐らく醫學的方面の見解によつて居るものかと考へられる。然らばノールウエーの競技には滿十八才以下のスキーランナアに對してのディスタンスレースは無いかと云ふに、然らず。即ち全ノールウエーのスキーランナアにオープンとして開催せらるる皇帝競技は、其參加者の年齢の制限のないディスタンスレースである。

更に相違する點と云へば、ジャムピング競技もあげ得るであらう。即ちノールウエーには特別に年齢別によるジャムピ

ング競技と云ふものがあるが、國際競技では別に年齢の制限によつて區別を劃然とはつけてない。然し三二才以上の年長者に對しての特別扱ひも亦附記せられて居り、大項に於て、國際もノールウエーの規定も大差なきを知るのである。

飛躍距離及び疾走時間を點數によつて表す方法

これは今更云ふまでもなく、一競技者に對して審判者の與ふる點の多少によつて決定する、即ち採點方法によるものである。此採點方法には、大體一點式方法と二〇點式方法といふものがある。

而してこの採點法は、ジャムピング競技と復合競技の場合に於て用ひられるものである。

私の論述の都合上採點式の理解を持つて戴く爲に、此處で簡單に現在國際的に使用せられて居る採點式についてジャムピング競技の場合の飛距離と、復合競技に於けるディスタンスレースのタイムを點數で見出す方法を説明することにする。

現在行はれて居る採點と云ふのは最高を二〇點とし最低を〇點とするものである。

ジャムピング競技の方は次の如き表から點數を出すのである。即ち次表に於て斜邊の斜列の數字は競技の結果から決る最長不倒距離を見出すものにして、左側の縦列で最長不倒距離に滿たぬ各ジャムパアの不倒距離を見出すのである。斯くして得たる兩者の交點の數字が、或不倒ジャムプの飛距離の點數となるのである。例へば二五米が最長不倒距離であつた場合には二五米の點數は二〇點であり、二〇米の點數は一七、五點となる譯である。即ち〔a〕圖の矢の方向に縦横を走つて交點一七、五を見出すのである。又最長不倒距離が二三米なる場合に二〇米の飛距離の點數は、一八、五となる譯である。夫れ故此處に 20; 19.5; 19.25; 18.75; と云ふ得點者があるとすれば點數の漸減と共に第一位、第二位と云ふ順位が定る譯である。尤も是は飛距離についてのみの順位である。ジャムプ競技の決定法は外にスタイルの點數が加へられて審査の上優劣順位が決定せらるるものにつき是は後述することにする。

次にディスタンスレースに於ては如何なる工合に所要時間が點數で出て來るかについて述ぶるであらう。

〔a〕

	↓ 25												
25	20	24.5											
24.5	19.75	20	24										
24	19.5	19.75	20	23.5									
23.5	19.25	19.5	19.75	20	↓ 23								
23	19	19.25	19.5	19.75	20	22.5							
22.5	18.75	19	19.25	19.5	19.75	20	22						
22	18.5	18.75	19	19.25	19.5	19.75	20	21.5					
21.5	18.25	18.5	18.75	19	19.25	19.5	19.75	20	21				
21	18	18.25	18.5	18.75	19	19.25	19.5	19.75	20	20.5			
20.5	17.75	18	18.25	18.5	18.75	19	19.25	19.5	19.75	20	20		
→ 20	17.5	17.75	18	18.52	18.5	18.75	19	19.25	19.5	19.75	20	19.5	
19.5	17.25	17.5	17.75	18	18.25	18.5	18.75	19	19.25	19.5	19.75	20	19
19	17											19.75	20

〔b〕

走者ノ所要時間——→

時 分 秒		時 分 秒	得 點
1. 12. 15ヨリ	——	1. 12. 29マデ	20
1. 12. 30	——	1. 12. 44	19.875
1. 12. 45	——	1. 12. 59	19.75
1. 13. 00	——	1. 13. 14	19.625
1. 13. 15	——	1. 13. 29	19.50
1. 13. 30	——	1. 13. 44	19.375
1. 13. 45	——	1. 13. 59	19.25
1. 14. 00	——	1. 14. 14	19.125

ディスタンスレースにあつては、所定の距離を最短時間で滑走せるランナアに最高二〇點を與へ、以下十五秒毎に$\frac{1}{8}$點を加へて行くのである。例へば最短時間を(b)圖に示せる如く一時間一二分一五秒とすれば、一五秒毎に$\frac{1}{8}$點を加ふる事になる故一時間一二分二九秒までのランナアは、二〇點の得點になる譯である。それでは二〇點の得點者が何人も出る譯であるが、此れは此ディスタンス競技のみの競技に適用するものでなく、ジャムプ競技とのコンバインドになつて居る復合競技に適用せらるるものであるから、不合理は起らぬのである。實際二〇KM競技に於て、ゴールインで十五秒以内で入るランナアの力といふものは、そんなに相違するものではなからう。又點數の計算法から云つても、洵にジャムプの方と都合よく出來て居るのである。即ちジャムプの方では一米の差に0.5點の差をつけて居るのに對し、ディスタンスでは一分違つて0.5點の差がついて居るのである。尚實際競技に當つての採點の精しい方法は後に讓ることにして、次に一點式法と二〇點式法について逐次述ぶることにする。

一點式と二〇點式採點法

一九二三年のシャムニィに於ける國際スキー聯盟會議に於て國際的スキー規定の決定を見るまでと云ふものは、ジャムプ並びにディスタンスレースの採點法は、各國によつて異つた形式をとつて居たのである。

實際南歐、中歐の諸國即ちスウイス、ドイツ、オーストリー、ポーランド、ハンガリー、チエツコスロバツク、フランス、イタリー等では一點式方法を採用し、北歐のスキー王國ノールウエー、スウエデン、フインランド等では已に最新式なる二〇點式法の制をとつて居たのである。

而して一點式なる方法も一九一一年まではノールウエー地方では使用して居たことはノールウユースキークラブのスキー規定に明かに見出すことが出來るのである。尤もその年には二〇點式の第一次的時代（後述せり）の制も併用して居るやうである。

實際年代的には、一點式、二〇點式の變遷は明瞭ではないが、スキーが北歐より南歐、中歐に傳はつてより三〇年前後

に過ぎぬ點より見て、又スキースポーツが中歐、南歐に於て盛になつて來た年代から推して、中歐、南歐の諸國が、極く最近まで一點式法に依つて居たのに反し、北歐の諸國では已に一〇年前に於て舊式な一點式法を廢止して新なる二〇點式を用いて居たことは、北歐の先覺を語るものであらうと思ふ。即ち一點式法は北歐より南歐、中歐に傳へられて、更に最近二〇點式法が亦北歐より南歐、中歐に傳へられて、此處に殆んど二〇點式法は世界的となつた譯である。

この一點式より二〇點法に變つた時に於て、近代的世界一流のスキーランナア Stevau V. Devan は語つて居る。吾々中央歐羅巴人は、――(時々止めた)――已に斯樣にして吾々の從來のシステム(一點式法)に慣れ切つて居た。夫れ故此全く新なる方法(二〇點式法)は少からず吾々の實行を困難ならしめた。されど吾々は毛頭爭はうこは欲しない。即ちこのノールウエーシステムは、――特に復合競技に於て――非常に便利な方法である。即ち何等六ケ敷い計算もなく而も速かに、且又點數の決定は非常に容易である。

次に私は簡單に是等の方法につき內容を說明する。

一點式法とは、最高を一點として〇・一又は〇・〇五點を公差として數を漸進的に加へ、數の增加度により順位の下降を示して居るのである。例へば此處に五人の入賞者ありて其得點が各々1; 1.15; 2.0; 2.05; 2.15; なる時得點1なる人が最優勝で1.15なる人は第二位者、以下2.0; 2.05; 2.15; の人々は、夫々第三位、第四位、第五位者を表はして居るものである

次に二〇點式方法とは、順位の下降すると共に漸進的に數の增加する前者の如き方法とは異り、滿點を二〇點として數の減少すると共に順位の下位を示すもので、最低位を零點として最高が二〇點のものである。

例へば20; 19; 18.95; 18.5等の得點者ありとすれば20點の得點者は第一位にして、19點の得點者が第二位18.95; 18.5; 點の得點者は夫々第三位、第四位を指すものである。

而して一點式法も歷史的に考察する時は、二次的の變遷をして居るのである。

その第一次的のもの、これは恐らく採點式の最も古い形であらうと思ふが、その形式は次圖の〔c〕圖如きものにして

第一次的一點法〔c〕

20																				
	1.0																			
		19																		
			1.1																	
				1.0																
					18															
						1.2														
							1.1													
								1.0												
									17											
										1.3										
											1.2									
												1.1								
													1.0							
														16						
															1.4					
																1.3				
																	1.2			
																		1.1		
																			1.0	
																				17
																				1.3

第二次的一點法〔d〕

20																				
	1.0																			
		19																		
			1.05																	
				1.0																
					18															
						1.10														
							1.05													
								1.0												
									17											
										1.15										
											1.10									
												1.05								
													1.0							
														17						
															1.15					
																1.10				
																	1.05			
																		1.0		
																			1.15	

公差が大體"0.1"で表はされて居るものである。此形式を使用してから、尙審判の採點に當つて細く差違をつけ得ることを知り且つ其必要に迫られてか〔d〕の如き一點式法の第二次的變化が來たのである。

所がこの〔d〕の方法は是を三〇—四〇單位まで續けて點數を出すとすると非常に繁雜になるのである。而も之をディスタンスに應用するとせんか、一點の差を作るのに五分以上でなければ一點の差が出ぬと云ふことになるのである。而してジャムプの方では五米や六米では一點の差がなか〳〵に出て來ぬのである。若しもディスタンスに於て最短時間が一時間一二分一五秒であるとする時、規定の如く一五秒毎に$\frac{1}{8}$點の差をつくるものとすれば一時間一二分一五秒の人も、一時間一六分五九秒の人も最高一點の得點となつて、タイムの差の開きの大に比して、點數の開きが甚だしく小なることを示すことになる譯である。不合理な事は何人も首肯し得ることであらう。

で目下最も合理的方法として推稱せらるゝ半米につき〇・二五點の差を有する二〇點式の採用せらるるのも自づと理解出來るところであらう。

更に二〇點式採點法についても亦時代的の變遷を伺ふことが出來る。即ち次圖に於て見る如く、

〔e〕

25					
24	25				
23	24	25			
22	23	24	25		
21	22	23	24	25	
	20	19.5	18	17.5	16
		20	19.5	18	17.5
			20	19.5	18
				20	19.5

〔f〕

25					
24.5	25				
24	44.5	25			
23.5	24	23.5	23		
23	23.5	23	22.5		
22.5					
	20	19.75	19.5	19.25	19
		20	19.75	19.5	19.25
			20	19.75	19.5
				20	19.75
					20
					18.75

〔e〕圖にあつては一米の差に對して0.5點の差をつけたものあり、〔f〕にあつては一米の差に對して矢張り0.5點の差であるが、更に前者では得られなかつた半米の差を作つて一層精密に點數を出したもので半米以下について更に精密の差を出す必要なしとすれば、この方法によることがよいことを知るのである。即ち前者にあつては單に二〇單位にすぎぬものであるが、後者は之を四〇單位にまで精密に分ち得るのである。即ち前者では一米の差に對して一階級にしか分ち得ざるものを、後者では一米の差に對して二階級になつて居る譯である。從つて或る最高距離に對して之と接近し居る距離の點數は非常に開きが少くなつて、從つて飛距離の價値が增して居る譯である。この後者が即ち現在行はれて居るジャムピング競技の飛距離の點數表に見らるるところのものである。

而してジャムピングとの復合競技であるディスタンス競技に於ても以前の一五秒毎に½點を減じて行く方法をとつて前述せる如く、非常に便利な計算方法で成績點を出すことが出來るのである。是は已に例をあげて前述せるところなれば此處では略して置きたいと思ふ。

競技成績の最後の決定迄

採點表を使用しての競技と云へばジャムピング競技と、復合競技であることは已に周知の通りである。夫故ディスタンスのみの場合の競技では採點することの必要のないことは明白なことである。

先づ私はジャムピング競技の場合より論ずるであらう。

何故ジャムピング競技に於ては採點せねばならぬか。是はジャムピングスタイルとジャムピングディスタンとの二つの考査を合せて一つのジャムピングの得點が出されねばならぬことになつて居るからである。

而してその決定方法は如何かと云ふに、先づジャムピング競技の審査のことについて一言せねばならない。

何れの國のスキージャムプ競技でも一人のジャムパアの飛躍回數と云ふものが一定されてある。或國では少くとも二回と規定し、或國では三回を以て競技終了となして居るやうで、大體に於てこの二つの規定法があるやうである。

國際の規定では一人のジャムパアは少くとも二回飛躍することに規定せられて居る。

何れの場合に於ても一回のジャムプに對してはそのジャムプスタイルとジャム距離とが審査、採點せられ、その平均點が一人のジャムパアの一回のジャムプ得點となるのである。

而して何れのジャムプ競技に於ても三名のスタイル審判員が設けらるる規定になつて居る。夫れ故一人のジャムプアの一回のジャムプに對して大抵三つの異れる（時には同一のものもあらうが）點數が出る譯である。でその三人の審判の同一ジャムパアに對する異れる得點の和の平均が即ち一人のジャムパアが一回の飛躍をしたとすれば、各一回の競技點の和の三分の一がそのジャムパアの決定成績點となる譯である。即ち國際規定の方法を國際規定の審判表によつて實例をあげて說明すれば、今次圖Pジャムパアについて說明すれば、

第一回目のジャムプに於て彼れは、二六米飛んで居る。で最長不倒を二九米とすれば二六米の飛距點が18.5點と別表で出てくるのである。而してその時のジャツヂAのスタイル採點が16點であるとするとPの第一回目のジャムプに對するジ

ヤッヂAの競技點が 17.25 になるのである。同樣に他のB、Cなるジャッヂの審査點もPの一回のジャムプに對して出て居る譯である。その三人の點を加へて三分すればPの一回目のジャムプの平均競技點が出る譯であるが、一回づゝで斯く

Schedule No. 1

No.	Name	1st. Jump				IInd. Jump				3rd. Jump				Chief award in jump	Notes
		Style	Length	Average award	Notes	Style	Length	Average award	Notes	Style	Length	Average award	Notes		
1	P	16	18.5	17.25		17	19.25	18.125		7	f.	7.		14.125	
2	K	10	f.	10		19	20	19.5		20	19.5	19.75		16.416	
3	J	14	17.5	15.75		15	17.5	16.25		15	17.75	16.375		16.125	

N. N.
Judge A.

Schedule No. 2

Longest standing Jump 29m.

No.	Name	1st Jump		2nd. Jump		3rd. Jump		Notes
		Meters	Award	Meters	Award	Meters	Award	
1	P	26	18.5	27 ½	19.25		f	
2	K		f	29	20	28	19.5	
3	J	24	17.5	24	17.5	24 ½	17.75	

N. N.
Measurer.

することは繁雜なるが爲に、各ジャムヂが一人のジャムパアPの三回のジャムプの各回毎の平均を出して置いて、それを三分して總平均を出して後、三人の審判が集つてPの三回のジャムプの平均を加へ合つて、之を三分すれば、表の上に於て單簡に、早くPの競技決定成績點が出る譯でるる。

而して今ジャツヂAのPジャムパア三回の總平均が 14.125 となつた譯である。他も之と同樣にして點を出し得るのである。

次に復合競技の方では如何にするかと云ふに、復合競技ではディスタンスレースに出場した全部のランナアを、ジャムプ競技に出場せしむると云ふことは甚だ手數のかゝることであり、又時間を要するが故に豫め委員の方で制限してある最高時間以内にゴールインせるランナアが、ジャムプ競技に出場し得る制定になつて居るのである。例へば二〇キロを一時間三〇分以内に疾走してゴールインせるランナアはジャムプに出場し得るものとす。と云ふ樣な工合に示せるものであるそして今若し復合競技に出場せる一人のランナアがあるとすると、そのランナアが若しも夫々の競技に於て次の如き成績を得たりとすれば

ジャムプの決定成績	20KM・デイスタンス	
14.792	+ 17.125	= 31.917

$$\frac{31.917}{2} = 15.958$$

復合競技の結果の成績が 15.958 となる譯である。

以上に於て私は大体國際スキー競技の競技法の實際とも云ふか、審判者たるべき人の知らねばならぬ、又競技者も當然知るべき競技點數の問題につき記述を盡した積りであるから此稿の終りを告げたいと思ふ。

メンバーシップ

赤松勳

一隻のボートがその揃つたオールが水に入り、水より出で、後に渦紋を殘しながら波の表面を滑り行く姿は本當に氣持よく感ぜらる。此はよく一隊の登山者の行動にまで例へらる。

此の力の均整と心の合致とはメンバーにとつて最も重要なことで、メンバーシップの必要なファクターも此に存することは言を俟たない。

私は烏滸がましくも此のメーバーシップに付いて私の氣付いた點を二三述べたいと思ふ。既にリーダーシップに付いては「山とスキー」紙上に書かれたから此の點については重複を避けたい。尙私の述べんとする範圍は主として登山及び旅行に於けるものとする。

旅行殊に登山に於てそのメンバーがリーダーを推薦して其のリーダーの命に從つて一定の行動をとることは勿論必要である。然しリーダーに絶大の依賴をなすことは不可能であると思ふ。それはリーダー自身が他のメンバーより非常に卓越した頭腦と技術とを有するものとは常には考へられぬ故である。勿論依賴することは必要であるも賴る即ちリーダーまかせに凡ての行動をなすといふことは禁ずべきである。即ち相互に考慮と努力とをなすべきである。

さればメンバーに如何なる條件が必要であるかと云ふに前に述べた樣に力の均整と心の合致とであるが、登山に於ては力の均整といふことも勿論重要であるがそれ以上に私

は心の合致といふ點が最も大切であると考へる。

心が合致してゐることは技術以上に大なる力を爲すものであると考へる。クルーの各自の力は如何に強大であつても心が合致して居ない場合にはオールが不揃ゐとなつて各自の力を充分發揮さすことが出來ぬのみか往々にしてスプラッシュを起す。そしてクルーの行動は阻害せらる。

丁度此と同じ事實が登山のメンバーに於ても見出さる。心の合致して居ないメンバーであるゝ時間を徒費したり、又コースの事等で無駄な議論をしてメンバーの氣持ちを惡くするのである。此等の惡い印象は段々と育成されて終に外に表はれ、動作に出て來る樣になる。こんなちぐはぐの心がメンバーに起つたとしたら、その登高行の行績を半減すると云つても過言ではあるまい。

そして互に排他的であつてはならぬ。本當に山を愛する登山者達の間にはそんなことは起らぬだらうが人間はセンシブルの動物である以上はそんなことがないと斷言することは出來ぬ。勿論山を冒瀆するのは例外である。山といふ偉大なアトモスフエアーに向つて禮讃するのであるから登山者はそんな排他的の感情を懷いてはならないし、又感情がわだかまつてゐたとしたら抑壓せねばならない。一隊の登山者のメンバーに加はらんゝするものは此の感情を抑壓せねばならぬ。又登高に對してメンバーとして組織された各個人は社會的にどんな差異があつたとしてもそんな事は全部皆の心から取り除かねばならぬと思ふ。自己の社會的地位を山の上にまで持つて行かんとする考へは除かねばならぬ。たとへそれが高位にあるものであつても又下級の地位にあるものであつても互にその階級的意識を取り除いた心を持つことが必要と思ふ。強いて云へば山には山なりの地位があると云ひたい。社會的地位が直ちに併用されるとは思はれない。又之は餘言ではあるが山中にて登山者が互に遭遇せし際に一方で會釋した場合にその言葉が交際社會で用ひらるゝ樣な丁寧な言葉でなくとも眞意をこめて挨拶した場合にそれに應答せぬ樣なものがあつたとしたらそんな者は登山を宣傳のためにする人間で山を食ひ物にする似而非登山者ではないだらうか。かゝる彼等が自然を冒瀆することの甚だしいものではないだらうか。又登山者の障害を働く樣な人間さへ生ぜんゝする世相が見へた。此が登山者と稱するものゝ中に見出されんとは。彼等は大自然の殿堂に膝間付いた自己の心が自然の鏡に反映することを恐れて只管に無形の言を吐かんとするものではないだらうか。

私共が雪期の登山に於て見せつけられることがあるが雪がよくしまつてスキーがそんなに埋れない粉雪の場合には困難でないが新雪が軟かく積つてスキーが深く埋れる樣な場合は先頭即ちラッセルは非常に努力を必要とするからそれに伴つて疲勞は早くやつて來る。されば先頭から第二番目のものが交代してラッセルをつけて行くのであるがそんな場合に往々ラッセルをなす努力を回避するものがある。勿論之がメンバーの中にて非常にスキーが拙いとか体力が他のメンバーに伴はぬ場合には詮方ないとして自他共に許すであらうが。スキーイングも体力も共に他のメンバーと平衡し得る人にそんな考へのものを見ることがある。此がメンバーにとつて非常に悪い思想である。之を私達はラッセル泥棒と云つてゐる。誰だつて好んで勞力を出すものはないがしかしその努力をなして始めて登高の目的が達せらるのであるから皆が之を回避せばその登山は中止となり、メンバーの半數が回避せば他の半數は二倍の勞力を要することになる。勞力を盡さずして過分の報酬を得んとする。之を泥棒と云ふは過言ではあるまい。

信愛し合ふこと之がメンバーシップに必要なことである此の心があらばラッセル泥棒等の考へは起らぬ筈である。勿論協同の行動であるから各自が自己のみの考へと一致するとは常には考へられぬ。それは自分と全く同じ人間が此の社會に一人以上生存しないからには到底望まれぬことである。故にある程度までは互に我慢することが必要であるメンバーが各々或る程度まで我慢して而して或る一致點を見出すことが必要である。各自が互に心を察知し合ふことは容易な事ではないが今述べた樣に互に或る點で心を合致さすと云ふことは出來得ると考ふ。

次にマウンテニアーリングのアートである。即ち登山術には例へばロッククライミングとかスキーイング等がある例へばスキーイングに於てやつとステムボーゲンが出來る位のものとスラロームが自由に滑ける位のものとが同一メンバーにあつたとしたらそのメンバーの行動は非常にスキーイングに依つて支配される。セレクトせられたメンバーに於てはスキーイングとかロッククライミング等の登山テクニックが同等に熟達してゐることが必要である。然し學校の旅行部とか山岳部とかゞ部として行動し、後輩を導く樣な登山では熟達者の中に未熟達者が加入することは避け

がたい。その場合メンバーの行動は熟達者に依つて指導さるゝことは言ふまでもないが結局未熟達者に依つて彼等メンバーの行動の結果を結ぶのである。即ちかゝる場合にはそのメンバーの行動のレベルは未熟達者の力を標準とせねばならぬからである。

此のメンバーの標準を如何にして決定するかといふことは非常に大切なことである。或はメンバーの技術のみに依る場合、天候又は登らんとする山岳に依る場合、又は使用するミッテルに依る場合もあるだらう、此の様に標準を決むべきファクターは澤山ある。故にその時のコンディションに依つてリーダーも各メンバーもよく考察せねばならぬ總じて登山ではメンバーの行動の標準を未熟達者の方に置かねはならぬと思ふ。

一つの登山を企てた場合各自が相異つた能力を有するメンバーならそれに相應した努力を相互のために盡さねばならぬ。即ち相互扶助の心が必要である。或はステップを切るとか又はブッシュ分けをなすとか、或は又ラッセルを付けて自己よりも未熟達者のために登高を容易にすることが肝要である。例へばスキー登山の場合にはラッセルをなす事に依つて其のメンバーの未熟達者の登高を容易ならしめるのであるが、そのラッセルをなす時間とか距離等は全然問題外である。此は規則正しく時間や距離等を定めらるべきものではない。それはウエザーコンディションに依つて雪質が異なり、高地と低地とに依つて趣を異にし、又喬木帶と灌木帶とに依つて異なるばかりでなく其外尚スキー術と体力とのコンビネーションである能力が、ボデーコンディションに依つて異なる等の原因がある。そんな理由で各自が餘力のある程度でラッセルを續けて後休息し、その間他のメンバーがラッセルを續ける。かくして疲勞を回復さし再びラッセルをつけて行くのである。故に未熟者はラッセルの苦しみなくして進んで行く。理想的に云へば各自の疲勞が數字で若し示されるものとしたらトータルの疲勞は數字に於て各自異つてゐてもバーセンテイジから云ふと同じ程度となるべきである。然しこんな理想は實際には望めぬが之に近からんことを各自が望み且つ行動すべきである。

次に体力である。体力は殆んど絶對的のもので其の日のボデーコンディションに依つて多少異るとも云つても人々に依つて殆んど確定してゐるのである。

然しスキー登山の場合の如く登山にミッテルを用ふる時

はそのテクニックの修得に依つて体力とスキーイングのコンビネーションに依り体力の少ない人でもある程度までは登高の目的を達することが出來る。此と反對に体力强健なるともスキーイングの經驗少ない人にも同樣な事を云ひ得るも、しかし体力に惠まれた人は前者に比してエナージーに富むだけ有利である。即ちボデーエナージーに依つて所謂頑張る力が大である。しかし体力を過信してはならぬ。登山に於て一面に於て大膽でなければならぬが、又他面に於て細心であることが必要である。猪勇は避けねばならぬ。徒らに大膽にして省みることがなかつたら自己を害するのみならず又他をも害するのである。

次にリーダーについて一言したい。リーダーは勿論メンバーの一人である。而して他のメンバーと異なつてゐる點は此のメンバーをマネージする點である。故にリーダーは他の者と略同樣の肉体的勞力を要すると同時に尙精神的の疲勞を要するが故に其の勞力は他のメンバーに比して遙かに大である。そのためスキー登山等の場合はラッセル等で節減して緩急の場合に冷靜に事を處斷する能力を保たしめるのである。然し此は非常に努力を要する山岳の登攀の場合に必要なことであつて普通の登山ではそんなにまでなす必要はないと思ふ。私はリーダーもスキーの登山の場合にはラッセルの勞力をある程度まで節減するはよいとして全然之をなさぬ事は不可と思ふ。ラッセルの必要を感じない樣な場合は別としてラッセルの恩惠にあづかる事が大な場合にはある程度までラッセルをなすべきと思ふ。もしメンバーが脚の揃つてゐる場合には、その中にラッセルをなさないものがあるとすると非常に樂な登山となるそのため他のメンバーと体の疲勞に於て大きな差を生ずる此はよくないと思ふ。緩急の際に備ふためにかゝるワークを省略して体力に於て他のものに比してより彈力性を長く保持する樣にすることは必要ではあるが身体の疲勞のために明晰な判斷を下すことが出來ぬまで悃憊する事は起らぬと思ふ。かゝる場合が生じたとせば最早正當な判斷をなすべき時又は場所を經過してオーバーワークに陷つてゐたものと推察する。もし此のオーバーワークが正當の判斷のもとに行はれたものとしたら其後は各自が出來得る限りの意力を盡すべき決死的の場合であると考ふ。勿論ここまでも相互扶助の精神を沒却してはならない。然る後は自然の御意に待つべきである。もし正當の斷案の下に行はれた努力後のアクシ

デントに對してはリーダーの思慮に待つべきことはあつてもリーダー一個人の体力にのみ依らねばならぬ場合は殆んど起らぬエベントと思ふ。

私は合理的に行はれた登山の場合にはオーバーワークはなさずにすみはしないかと思ふ。勿論理想的に考へられたプランに於てもそれを阻害するファクターは非常に澤山存在するがために意想外のオーバーワークをなさねばならぬ樣な場合が起らぬとも限らぬが、その不可抗力をば未前に防ぐことは私達の運命を豫斷することが出來ぬと同樣に不可能である。不可抗力以外の現象なら大体に於て未前に防ぐことが出來ると思ふ。又アクシデントが起つたにしても互に救助し合ふことが出來ると思ふ。不可抗力に對しては人意を以て如何んともすることが出來ぬ。生も死も共に運命の彼方に於てのみ知らるのみ。

さてリーダーは如何にして決めるか、此はメンバーの互選によるが一番公平だと思ふ。兎もあれリーダーはメンバーが信頼し得る人物であつたらよいのである。

以上とりとめもなく愚見を弄して讀者諸兄をわづらはしたことを許されたい。

尙此のことは大きい問題であるから互に意見を交換してメンバーシップに對する權威ある斷案をなされんことを希ふ。

スキー材と雪と蠟とに就いて

岡村源太郎

從來のスノークラフトは、主として雪とスキーテクニックとの關係を重要視して論ぜられて居たらしい。即ちスノークラフトを等閑にしたスキー家は如何にそのテクニック自身が優れて居ても、堪能なスキー家たるの資格が無かつた。そして現在も猶然うである。然し近來は雪に就いての研究對照物は從來の如き狹い範圍のみでは不充分となつた即ち、雪とスキー蠟、雪とスキー材或は之等三つの間の種々なる關係もが重んぜられなければならなくなつたのである。スキー材と雪とスキー蠟とに就いての研究がもう少し進まなければならない。殊にスキー材に就いては、我國の如く、良材種の少い國に於て、一段の特殊的研究を必要とする。

此の事柄に就いては、我國に於ても注意深い人は既に充分に了承して居らるゝ事であるが、私自身が之等の研究の必要を痛切に感ぜしめられた機會を有した事も少くないと思ふ。そして現在になつて、あの當時これだけの智識を持つて居たら……と思はせるやうな、或は彼が此の點にもう少し注意深くあつたならばと考へらるゝ事柄が僅かな私のスキー經驗の中にもよく起つて居る。それ等が皆此のスキー材、雪、スキー蠟殊にその相互の關係に關する無智失策に原因して居るのである。

スキー材の研究は、その材種に就いては以前に摩擦係數によつてその滑度の最も大なるものが最良と定められた事があつた。然しスキー材はその重量、丈夫さ、硬さ吸濕性

等を論外にしてさへも、その撰擇に當つては材と蠟との關係雪質によるスキー材の良否、使用目的によつての材と雪質との關係を念外に置く時は、周到であつた筈の觀察も意外の不結果を來すものである。その實際的應用の際の利得によつて、スキー登山或はスキー競走の際に於て直接大なる影響を與へられる。

スキー蠟の問題にしても、スキー材とは少からざる深い關係を有し、或は單に蠟の種類のみについても目的により雪により色々と考慮をめぐらさなければならない。猶近來はシュタイグワックスの製造研究が盛んになつて、此の研究に對しては先進國スキー家も可成困難を嘗めて居る程であつて、之が雪との關係に就いては隨分頭を惱まさるを得ない。スキー競技に參加する者は確實にその實力を發揮する爲に、スキー登山を試みる者は最もベクエムに而も危險少く登山を終る爲に、スキージャムバーはアプローチの猛烈なスピードを得る爲にそれ〴〵の雪と蠟に對する研究が重要である。

之等の雪とスキー材スキー蠟との關係を明かにして研究を進める事は、從來の狹い見地に於て研究せられた仕事に比しては隨分大なる範圍に渡るもので、又少からざるスキー使用に對する經驗が無くてはならぬ。從つて之を充分に明かにすると云ふ事は、到底一人や二人の力では不可能である。それ〴〵のスキー分科の專門に向つた人々が、實際の經驗に徵して、之を基礎として注意深く研究を進むべきである。

私も此の事柄に關してば從來幾度かその研究問題を速やかに解決するの必要を感じ、又之等に關する無智の爲に、意外の失策或は身体の傷害を來した例に接し、先輩よりもその研究を奬められて居たのであるが、微力なる自分が短いシーズン中に到底その問題に手を染むる暇がない爲に、唯誰か之を試みる人は無きかと徒らに待つて居たばかりである。然し此處にスキー材と蠟と雪とが甚だデリケートな關係にあつて研究上大いに興味あり價値ある事を廣く紹介して、一日も早く此の問題の各方面に於ける研究者を得て興味ある結果を聞きたいと思ふた次第である。

それで私は從來の貧しい經驗のうちより、或は文獻より之等の問題の研究にいくらかでも基礎を與へるやうな事柄を拾ひ上げて見たいと思ふ。勿論極く淺い經驗中に感じた事が主であるから、その記述も極めて順序を誤り了解に困難な點が少くないと思はれるが、幾分なりともスキー材と

雪とスキー蠟との關係が極めてデリケートで且つ重要なものである事が認められゝば幸ひである。

スキー材と雪

スキー材は雪質によつて優劣の程度が甚だ相違する。その材の性質中で雪と最も關係あるのはスキーの滑度である此の滑度は材種の異ると共に、甚だ異るものであるが、之の優劣は雪質によつて大いに變る事がある。理論及び經驗上イタヤ、トネリコ等の材の緻密なものは、導管の多い多孔質のケヤキ、アカダモ等に比して乾粉雪に於ては極めて滑りが好い。新しい乾雪の際には或種のアカダモは底面に一面にパラフィンを塗つても、殆ど滿足すべき平地滑走が出來ない事があつた。滑降にも他の材種のスキーの半分のスピードも出ない。然るに雪が一變して濕雪の稍凍結しかゝつた雪の場合は春の結晶雪の上では、アカダモの滑度は滑走の經驗によればイタヤ等と少しも變りが無い。底面が多孔質にザラ〳〵したアカダモのスキーで、春の凍結を繰返した雪の上を極めて痛快に滑走する事が出來る。

又ケヤキ材の如きは濕雪の際にはイタヤ等とはその滑りは殆ど變りないのみならず、反つて多孔質なる爲に塗蠟の工合が良好で從つて實際には甚だ穿き心地がよい。短い狹いケヤキ製のスキーを穿いて直滑降する際に、舶來の長いスキーより速く直滑降し得た事がよく經驗せられた。

スキー競走が盛んになり登降のクロワスカントリーレースが行はれるやうになつてから、スキーは登りに後滑りしにくゝ、降りに速やかに走るスキーを必要とするやうになつた。此の目的に對しては或材種のスキーは凍濕雪面に於て登行の際に十五度位の斜面でも殆ど後滑りする事なく普通のスキーにて登るより數割速やかに登行し得るにも拘はらず下降の際にはノールウエー製のヒツコリー材に少しも劣らぬスピードで滑走する事が出來る。然るに一度雪質が變化した場所に至れば、そのスキーの裏に厚いパラフィンの層が塗布せられてあつても、殆ど緩斜面では滑降する事が出來ない。

昨年の春自分はヒツコリー材のスキー、K友はクルミ材のスキーを穿いて一所に滑つた事があつたが、同時に直滑降やスウイングをやる時にどうも二人の調子が合はない。同じスピードで滑る事が出來ないのである。それは蠟とは全く關係無しに粉雪の日には自分のスキーがKの先になり勝ちなのに、粒狀雪の時には反對にKのスキーが遙かに速

く滑走したのである。

以上の如き例より推して、スキーと雪の關係は、雪質が乾粉雪、濕粉雪、濕凍雪、粉狀凍雪、塗蠟の場合等によつて驚くべき變化、時としては正反對の結果を示すものである事が考へられる。かゝる事實はほんの一部の概略に過ぎないが、柾目と板目に對する雪の變化、吸濕性と塗蠟等の事柄に關する種々雜多の關係が、數多のスキー材に就いて見出し得る事であらう。

雪とスキー蠟

世上には驚く程多種のスキー蠟が賣り出されて居るが、その良否に就いては隨分スキー家殊にスキー競技者を惱ます。よく滑る蠟を得たと思へばハゲ易くて充分にその目的を達し得ない事があれば、高價な舶來の蠟でも極めて滑りが惡くて白蠟にも劣る事のあるのを經驗する。札幌あたりでも中學生スキー家が、わざ〳〵高い金を出して滑りの惡いノリの思はしくないワックスを購入使用して居るのを見受ける事が多い。勿論未だ我國では携帶向きの摩擦塗布に適するスキー蠟の製作品あるを聞かない。

ワックスは又雪によつて甚だ効果が相違する。今冬の或夕方の滑走の時にアヲダモにパラフィンを町嚀に塗つたスキーで平地滑走がやりにくゝて困却した事があつた。然るに斜面では—その日は稀な良雪と謂はれた日—冬期の滑降としては最大のスピードを得る事が出來たのである。

猶蠟(ワックス)を塗るには、時としてスキー材の性質を大いに考慮に入れねばならぬ事がある。良好な一度塗蠟すれば一週間も塗蠟の必要の無い事もあれば、スキー材の性を考へずに塗蠟した爲に一滑りで全くワックスの効果を失つてしまふ雪質の事もある。

又春の夕の粒狀雪の上では全く塗蠟無しで、蠟で塗りつぶしたスキーで冬の雪を滑るよりは一層速やかに滑走する事が出來る。

よく困難なスキー登山に於て、濕雪の爲に一同が非常な困苦とプラン外れをやる事がある。自分も以前に雪と蠟とに對する無智の爲に、スキー登山の際に思はぬ惡雪に出逢ひ、登山に慣れぬ自分は極度の疲勞と意外の時間消費をやむなくせられた事があつたが、今考へれば當時の困難は容易に解決し得る策が在つたのである。雪と蠟に注意するスキー登山家は、確かに容易に豫期の成功を收める事が出來る。殊に我國の如き中山型の山岳の多い所にあつては、之

等の山を志す人々には現代の塗蠟法を幾分なりとも研究する必要がある。實際昨年我々が遭遇した友の不幸も、雪と蠟に今少し注意したならば或は無事に濟んだのでは無いかと考へられる。

ワックスについてはスキー界の驚異の的となつたシュタイグワックを我々は忘れる事は出來ない。登り蠟は歐洲では大部以前より使用せられて居るが、我國に入つたのは一昨年が始めてである。然し我國は勿論中歐でも此の登り蠟に對する雪との關係は未だ明かになつて居ない。僅かに硬雪、軟雪、乾雪、濕雪等について大略が記述せられてあるに過ぎない。單にケレンデラウフの實用には此の大略を知りおくだけで充分であるが、スキー競技には極く微細な點まで詳しくする必要があるのである。

此のシュタイグワックスと雪との關係の極めてデリケートである事は驚くべき程である。同日同時刻でも僅か高距一〇〇米位の差で、登りに極めて効果のあつた蠟が全く用を爲さゞるに至つた事を經驗して居る。或は或時刻に最も有効であつたスキー蠟或はシュタイグ蠟は、時間の推移により雪の變化すると共に、著しく相違して來る。之は我國の如き濕雪の多い國に於ては、實際の上に殊に顯著な影響を及ぼし易いやうに考へられる。

例へばオーストバイのテーアの方やブラトリースは、大抵の雪の場合に登り蠟として充分に後滑りを止める効があり、而も降りでは何等の支障もないが、乾粉雪上の滑走は此の蠟では殆ど不可能である。然るに自分は昨年の札幌のスラロームレースの際には、此の登り蠟を以て塗りつぶしたスキーを以て、他の降り專門のパラフィン等を使用した競技者に互して、殆どそのスピードに於て劣る所が無かつた。當日は稍々濕つた雪を保つ暖みのある日であつた。

登山には今後シュタイグワックスは海豹皮の代用品として大いに好評を博するに至るであらう。如何なる樹林帶に於ても使用し得られ、皮と材との間に雪が挾まる等の不愉快或は滑降の時の取はずしの煩雜はシュタイグワックスの使用者には不用な事である。スキー登山者は之に就いても、登山者の立場よりその使用法を研究する必要がある。そして一層確實なスキ登山の安全と愉快なラウフエンの獲得を求めなければならない。

雪　質

雪については隨分深く研究せられてあつて、今私がくだ

〳〵しく云ふ必要もないが、山に入つて奇異な雪に逢ふ時に何時も雪に對する驚異の心を新たにせざるを得ない、一シーズン中に經驗せる雪だけでも實に千變萬化で、若し詳細な觀察をするならば他の或る日と雪質を同じくする日を搜す事は甚だ困難なる事であらう。

輕くスキーで雪面を打てば粉雪が數尺も高く飛び散るにも拘はらず、滑降其他の動作がラッセルでも極めて容易である良雪があるかと思へば、固く積つた雪でありながらラッセルが極度に苦しみ其の上平地でさへも後滑りを禁じ得ない樣な不愉快な雪もある。後者の如き雪の時は、山に行つても後滑りのひどい爲にツィクツァックのレコード破りをやつて居るにも拘はらず、下降の際にはバージンスノーでは殆どスキーが前進しない事が經驗せられた。

同じ濕雪でもスキーの背に附着して困る時もあれば、同じスキーでその背の上を濕つた雪が玉をなしてコロ〳〵と轉つて行く時もある。

粒狀雪もその水分の含有度によつて非常に滑走感が異る所謂泥狀雪は殆ど滿足な滑降が出來ない。而も水分はそう甚しく含んで居ないらしい。時には、水と雪との量が何れが多いのかとも思はれるやうな、即ち水中スキー Wasser-laufen とも云ふべき雪もある。或はビートの如き春の極上等の雪もあれば凍結した鏡の如く人影を映す氷の如き硬雪もある。之等は春の登山には必ず經驗する所であらう。

單に雪を乾雪と濕雪とに分けてしまつても、その二つのユーベルガングには又驚くべき多くのデリケートな雪の變化がある。從つて之を前述のスキー材とスキー蠟の關係も煩雜にならざるを得ない。

甚だ取りとめもない事を無秩序に並べ立てたが、之は極く淺い私の經驗の中に起つた事を一寸述べたに過ぎない。讀者諸君の中にも之と同樣な經驗或はもつと〳〵奇異な現象に出逢つた人が少くないと思はれる。それ等がスキーのゲハイムニスの一端を爲すのであつて、今後之等の經驗を互に示し合ひ且つ之を基礎として充分なスキー材や蠟の研究を進めたい。

（一九二五・八・一九）

ブリタニアン・ヒユツテ（リンベシユホルン）

スキー蠟に關して

小森太郎譯

○

今日に於てはスキー蠟の專門的の研究がスキー家仲間に於て今迄の如く單なる研究に止まらずほとんど學術的に長足の進歩をなして來た事は非常に喜ぶべき事である。

然りといへども長距離の旅行とか又はスキーによる散歩といふ樣な場合のスキー蠟の事については（こゝにてはあまり述べないけれども）長距離のジャンプとかレースのときの場合程充分には研究されて居ない。故に我々はこの場合廣野滑走に於ける蠟の應用について述べて見たいと思ふ次第である。

本來蠟は所謂 „Pappschnee"（糊雪）の附着するのを防ぐためにスキーの裏に塗つたものであるが、現今に於ては單に雪の粘着するため滑走の防害になるのを防止する以外に登り用に迄用ひるに及んだのである。

又前年より殘れる非常に濕れる本來はスキーにへばり付かない雪のときでさへも現今にては特殊の蠟が發明さるゝに至つた。

故に恐らく吾人は次の原理を口にするに難かしくは無いであらう。

「スキー自身の木質が直接雪に接するよりもむしろ蠟の層が雪に接するに至るであらう。」

言ふ迄もないが如何なる蠟にてもよく乾燥せるスキーの裏に塗るべきで、多少なりとも水分があればあまり感心しない。

万一濕りたる木質に蠟を塗ろうと思ふとき、例ひそれがスキー旅行中度々起つてもそのまゝ煮たる亞麻仁油とか又は正しいそれに適したる蠟をすぐに用ひないで、先づ塗らんとする前にスキーの裏を太陽の方へ又は風の吹く方向へ向けて乾かさねばならない。でないとすぐに水分が凍つてしまふから。又そのときは上から下までスキーの裏は一樣によく乾かさねばならん。

かゝる次第であるから蠟といふものがスキーに對して必要欠くべからざるものであると思ふところの人は益々深く正しい蠟の神秘といふものに對して研究を積まねばならない。

滑かなる面のスキー（後滑りする）の登坂、及び濕れるスキーによりての下降に對しては、如何にあせらないで置かうと思つて辛抱しても心の中が丸で氣狂になる位、道のはかどらず且あせるものである。かゝるとき蠟がしみ〳〵有難くなつて來る次第である。次は種類に就いて述べる。

種　類

數へ切れない位多くのスキー蠟があるが、歸するところは次の四種類である。

一、凍つた雪用の登り蠟 "Steigwachs"

二、濕れる雪用の昇り蠟 "Steigwachs"

三、單に出發のときのみ單純に用ひる滑り蠟

四、新雪に對する特別の蠟

以下順次述べて見よう。

一、凍雪用登り蠟

この蠟は糊狀雪に對して粘着を防ぐといふより、足を出す瞬間この蠟のため抵抗を受けて速歩を容易ならしむるにあり。かゝる種類のものを總括するものは次に述べる樣な滑り蠟に似て堅いのもあるが、大抵は多少とも柔い位である

この登り蠟は決して他の蠟のように簡單のものでなくそれの處置法は他のものに比して大分異つて居る。則ちこの蠟の種類性質特性によく留意ありたいものである。

則、次から次へと一年毎に變つて行く特別なるマーク注意書その他の新しい事に關してよく調べて見る事だ。

しかし普通登り用蠟は大抵次の事柄を大切にして居れば（多少とも例外はあるだろうが）間違ひはないと信ずる。

A全体に薄く塗る事

B登行のときは滑蠟のように平等に擦つて塗らざる事とは云へ出發前にはコルクとは拇指球にて一面に廣がるように割合に注意して塗る事。

かように出發に際してかゝる正しい即ち一樣ならざる樣に塗つたる登り用蠟はそのまゝにて一般の滑蠟の代りをなすのである。又濕れる所謂糊狀雪にても然り。

則かゝるときには確實にSteigwachsとして作用するばかりでなく、前述の如く滑り蠟としても働く。

氷雪に對するSteigwachsは主に寒い冬期の登行及凍れる粉雪のときの出かけのときのみ制限されて使用さるゝものである。しかし正午又は午後に至りてすでに恐らく多少とも濕れる雪になつた場合にはそれの使用には一番手頃であらう。そのときには滑り蠟としてもいゝわけである。一寸した又はあまり永くないスキー旅行には海豹の皮の代用（補充）として用ふ。

それは登り坂が大きいのやら小さいのがしば〳〵やつて來るときにこれを用ひて居ると非常に愉快なものである。

雪の上で大抵の場合歩き（又は滑り）出すときに非常によくぴつたりと糊で張つたようになるので、このとき拇指球や又はコルクで擦つたりして滑かにする事は本來の硬い滑り蠟のする事で、登山に際してかゝる滑かにされたのを用ひるのはあまり感心しない。万一途中にてスキーの裏がつる〳〵になつたときは又新しく塗り直すのである。

二、濕雪に對するSteigwachs（昇り用蠟）（新雪ならざる場合）

初め數年の間用ひられて居つた蠟は殆んど蜂蜜のように軟かいものであつた。然して布切とか刷毛とか又は木片で塗つたものである。今は錫の罐入の蠟を少しあたゝめて平等に塗る事が出來る。かゝる蠟で濕れる雪や（Pappschnee）前年の雪又は濕れる新雪にての登行及下降が非常に愉快さを增す。かゝる雪にてしば〳〵吾人は進行に困る事があるが、この蠟が塗つてあるときは確かに不意に凍つた粉雪に逢つたときは強く膠着してすべり出すに少しも困る事はない。シーズンの始めにはあまり用ひない。

三、本來の„Gleit wachs,„滑り蠟

主に板狀又はチューブ入のやはらかいものである。初期に於ては、例外として用ひられて居なかつたものであるが今でもこれのみの目的に用ひる事は少い。

次第にSteigwachsのために侵略される傾がある。しかしこれとしても次の如きときには尙一つの價値がある。糊狀雪のとき練習場にて滑り難くなつたとき（そのときはスキーをすべ〳〵に滑かにして）體の重味だけでは（不斷滑るのが）滑らないようになつたとき用ふ。

旅行中は決してこれだけのためつける事は吳々も止めた方がいゝ。

實際坂を下るときこの蠟が塗つてあると非常に工合よくスタートが出來るので、特に北及南向の坂にて硬い濕り雪にては特にそうである。かたい滑り蠟はどんな雪に對してもすべり用としてよく働く。が、しかし常によくこの蠟に關して氣を付けると同時にSteigwachsをも直ぐに用ひる用意はして居らねばならん。

又重ねていふ事があるがこの滑り蠟にても塗るときは必ず板面をよく乾かしてから塗るべきは當然の事である。

板面についてあるのが古くなつたときは火斗等で又よく平滑にすべきである。

四、新雪用の蠟

新雪に用ひらるゝ蠟についてのどの人の批評もかなりむづかしいものであると報告して居る。

雪が降つて居るとき又は丁度雪の降り止んだときそれが凍つた粉雪と感じて居つても、それはべた雪である。

この事は注意すべきである。

新雪用としてこのときは前述の蠟を用ひればこのときはいゝわけである。

その他近頃新雪用として特に造られてある蠟を見るが尙研究の餘地があると思ふ。（終り）（一九二五・九・五）

（Wunler des Schneeschues より）

冬を待つ

（各地よりのスキーだより）

伯林の松方三郎氏、木原均氏より

山の話と運動競技の話をしにベルリンの町はづれ、しかも肉屋の二階で手製のヒルメシを御馳走になつて、一日を暮らします。僕は來月から研究所通ひを止めて、冬の支度にとりかゝります。と云つても別にする事もない樣ですが、身體の餘裕を作ることゝ旅行中の不便のない樣に、少しばかり言葉（獨逸語）を仕入れます。

スイスで二月頃、スキー黨を集めて、大いに辷らうと云ふ計畫もあります。その中にスエーデンのスタンプ付で、郵便が行くでせう。

冬の戀しい人達が相當澤山來て居ります、研究所と雪のある地を選んだと云ふ人もあります（僕ではない）。聞さんは砂糖大根はスウエーデンでも作つてると云ふ口述を作りました。ストックホルムは人間がいゝとかで、住み心地がいゝ相です。　九月二十七日　―木　原　生―

日曜に雨が降つては萬事休矣!!　均さんは研究所がなし小生は圖書館を閉め出され、かと云つて雨の中の散歩も物好き過ぎるし全く閉口、で今日は僕の家で、マカロニ、マギズツペで豪遊、午後七時まで何とかかんとか話し乍ら御茶を飲み續けた所。ベルリンの今日此頃は、天氣が惡く今日は家中ハイウングをやつて凌ぐと云ふ冷え方。早く一層の事冬になつて了へばなんかと考へて居ます、獨逸には餘り大した本ばないから、エバッテ送る樣なのはないので殘念です、十月にロンドンに行けば、益々品沸底になりませう。近頃出た本で此の間の Ski に紹介されて居る Marcel Kurz, Alpini sue Hiveral は繪がステキ也、尤もフランス

語故本文の批評はしませぬ。　―中略―

僕は何うもヒマラヤはいざ知らず、ツエルマツトはスキー地として一番いゝ樣に思ひます。麻生武治君は、ついこの間ホルメン、コルンに行つて、葉書をよこして曰はく、ダボスやグリンデルヴァルドの比に非ずと。ツエルマツトは何うも、又その上は手ですね。あそこは背景に、いゝ奴が、ぞろ〳〵あるんだから――ハンネス、シユナイダーの本參照、麻生君はスウイス仕込みのシーロイファー。いや冬が待ち遠しい。　―松方三郎―

ヘルシングフホルス(フインランド)の今泉剛一氏より

拜呈御芳書に接し喜び言の外に御座候

今冬は運好くも當地に於てインターナショナルのスキーゲームが開催さるゝとかにて誠に好都合の時に參り合せるを喜び居り候（二ヶ年に一回加入各國に於て持ち廻りの大會の由）其れが準備として三十万マーク（日本の金にして約一万八千圓）の費用を以てシャンツエを新設中の趣に候もまだそこを訪ねるの機會無之候併し何れはそれを御通信申上ぐる機會可有之と考居候

御存じの如く當地のスキー界はジャンプに於てはとてもノールウエー、スウイツルに及ぶべくも無之候が長距離に於ては全く他國を凌駕し居り候事は事實らしく候此の國の自慢の選手 Mr. Tapani Niku（タパネ ネク）には去月面會致し候が見るから長距離の選手らしき體格を致し居り候一體此の國はランニングに於てもその如く技術に依るよりも體それに依つて決すべき方面が他國を凌駕致し居るらしく候此の國の唯一のジャムピング選手バルモロス氏には度々面會致し居り候が（氏は今運動具店を經營致し居り候）私等が敢てそれを學ぶべき程の選手にては無之と存じ居り候何れ長距離とても敢て體格率にて決すべきものにては無之そこに大なる技術と細心の注意とを要すのは勿論の事今冬はネコ氏に就て專心長距離の方面を研究致し度在罷候尙御芳書の趣萬般承知致し候併し小生執筆云々の事はこても御期待に添ふべくも無之候へ共當地及ノルウエーの一流選手及その方面の關係者の寄稿は出來得るだけ奔走可仕候猶其の外は責任を以て努力可致候併し何分時下夏時に候間何れ十一月に入りての上の事と存じ候當地の各運動團體は其の聯合協會に於て合同し（其の協會を Urheiluliitto（ウルヘルリツトウ）と申居り候）現在十二のクラスを作り居

り候其の一つクラスにスキーが有之候バルモロス氏が今其の主腦者と相成居り候併し今全く仕事を中止致し居り十一月に相成て漸く仕事を開始仕る趣に候尚フ井ンランドにてはスキーを Ski-set（ソクセット） と申居りスキー及シーと申候ても全く通ぜざる有樣に御座候何れ今後順次御通信可申上候も不取敢御禮を兼ね御返事迄申上候　　敬具

九月十三日　　今泉剛一

（冬を待つのは何處でも同じです。木原氏、松方氏から度々御たよりを戴きました。「山のテツペンの繪よりも小屋の寫眞の方が實用的ですからチヨイ〳〵小屋を送ります」本誌寫眞版の一つはそれです。）　（編者）

湖の旅

館脇操

秋の阿寒へ

二度目の私と三度目のカニ。二人とも會遊の地さて至つて氣輕く、たゞ條件としては快晴の日に雄阿寒にのぼるといふ一つの共通な望みだけ抱いて、豫定もなく九月の六日に札幌を出た。

飽別にて

雄別炭山—飽別野澤驛遞　二里半

「ひどかつたね」カニが洋服をほしながら云ふ。飽別の驛遞に着いたのは午後五時であつた。

雄別炭山に下りる前から雨はかなり強かつた。舌辛で下り

やうかと云つたら、「何たいしたこともないよ行かう」といふまゝに舌辛をのりこした。雄別で下りて、とある家に飯を請ふたら、白粉燒のした女が「ないの」といつたまゝ笑つてゐた。簡單な身なりになつて、マヅ相ではあつたがパンを四つリユックサツクに入れる。雄別の街には質の好い小さな石炭がころがつてゐた。小學校の側で舌辛川を渡る。それからは伐木されても尙逕の兩側は恰好な森林をなしてゐる。アカダモ、オヒヨウ、ミヅナラ、シナ、カツラヤマモミヂ、イタヤ等の下を通る。逕にはブシの花が、紫の瞳をあけてゐた。雨雲の低迷する中に、エゾ、トヾが入りまじつてゐる。山一杯秋の午後をしんとさせてゐる。二人の足音だけが無性にわびしい。溪の終りがけでジクザクをきり、やがてに大樹の切られたらしい笹の道に出る。かりたての笹の葉が水に浮いてゐた。林間にポツリ〳〵開墾の立堀小屋が出る。いつか平坦な丘陵に入る。まもなくとある小屋に立ちよれば、意外にも阿寒の新登山道路は、そこからわかれてゐた。私達は悉皆眺望を奪はれた中に、歩みをつゞける。大樹の切株を前にして、カシハやミヅナラの林、それに白樺が二三、すらりとうち交る。山畑は秋そば花盛りである。道は判り好いと云へない。それでも開墾小屋が所々にあるので無駄なく徹別川に出ることが出來た。ネギをぬいてゐる子供に道を問ひ憩をたのんだら、小供はまさやの家にとび込んで枯木をくべてくれた。二人は始めて地圖をひらいて、磁石をとり出し、今越してきた所をかたり合ひ雄別から背負つて來たパンを火にあぶつてたべた二十分も休ませてもらひ四時十五分前に出る。

徹別川は雨の爲に膝程もあつた。對岸に渡つてからはひえ〳〵する夕暮が森に迫り初めた。發電所までの途中に二軒程開墾小屋があつたが、一軒には人が居ず、そこにもそばが花盛りであつた。阿寒川近くの繁みは暗く、第三發電所の工事場に來た時には電燈がついてゐた。飽別の野澤驛遞、そこは四年前來た時と少しもかはつて居らない。ランプの灯はくらく明日も心もこない天氣だ。（七—九）

誕生日に。

人生の總勘定させられるのは結局あとのこりの者だ。つまり人間は惡くとりのこされる不運を持たぬが好い。親のある中に死んだ子は親には不幸だが子には幸福だ。子のある内に死んだ親は、子供から云へば不幸で親から云へば幸福だ。要するに輪廻かは知らないが、貧乏籤をひかないです

むなら、ひかない方が好い。

世の親よ、子よ、出來る丈長生をなさい、そして出來るならお互迷惑にならぬ樣な自由をたのしめるお互でおありなさい。私は確信を持つて、私の誕生日に、あらゆる人にこれ丈のお祈りをします。

野澤——ルベシベ

俥別驛遞—ルベシベ驛遞　約三里弱

半日床の上でショウペンハウエルの「天然の意志」を讀む先日塚野君と散歩の夜、買入れた本だ。一寸面白い。晝頃小雨になつたので急いで荷物をまとめ、十二時半出發、道の惡い中で、測量に向ふ人達の馬車に會ふ。荷は車からあふれそうについてゐる。背廣の人が氣輕に挨拶したまゝ、私達も、爽かに帽子をとつた。秋の雲は亂れ勝ちにとびながら蒼い空を折々のぞかせる。阿寒川橋で一息いれた。こゝから人里に別れるのだ。月光を浴びてたどつた四年前の旅。時よ、しのびやかに行くお前の影よ。旅の子としての俺は今秋の山に居て、お前に、じいと熱い接吻がしてやりたい。冷やかなお前が有する不思議な魅惑と正しい批判よ愛のはたらきも愛のにくしみもひたゞ息とめて、空間に浮いた俺の姿を山が抱く。エゾヤマドリが二羽ポツリ〳〵と道を歩いてゐたが、近寄る足音にパットとび立ち藪に入るオンネナイ橋の側では山にむつくりわく夕霧を二人共貪る樣に眺めた。「行かう」カニが言つた時、かけすがないて上を通つた。木立の中に陽がさす。阿寒川の左岸の針葉樹林が急に浮きたつた。シナやアカダモの多い小暗い牧場の中に馬が默々として草を喰み、道ばた近くにゐた二匹は首を一振り振つて愛想よく私達の方を向いた。私達は尙森の中を進む。

オニユリの牧柵によつて咲くルベシベの驛遞には明るい中に着いた。夜は誕生日とて、二人でビールをのむだ。俺の生れた日、俺の親爺も多分飲むだらふ。俺は變に嬉しい氣になつた。でもその後でゆつくり時ゝいふものについて考へてみた。（八—九）

湖畔へ

ルベシベ—湖畔　約四里

窓を開くとスツとする風と共に、青空が見える。金色に輝く太陽の光の波に、朝の嬉しさがおのゝく。顏を洗ひに出たら窓が夜霧にしめつてゐた。標本の整理の爲に出發は八

時となる。

阿寒川に沿ふてピリカネップへ。この一里半餘の間の樹はひどい迄に伐られてしまつた。道は好くなつた。だが森林は泣きたい程にさびれた。人間の文化の歴史と共に自然が調和を失つて行く。「矛盾の中に生きよ」俺は都の中で人にもまれて強くさう叫んだ。でも秋の山に來て、二人位でポツリ〳〵歩いてゐるとそれはひどいうその氣がする。「矛盾は矛盾だよ」誰かゞしつとりと耳うつ。疎林の道はぬれて道路傍には萩が亂れる。

空は定まらなくなつた。風は北東にまはつて、うつすり陽がさしたかと思ふと、忽ちに山すつかりがかゞつてしまふふと出ると雨降りあげくにも似なく、阿寒川の水は澄んで曇り日の旅を行く。みなかみへ。そんな氣分が私を屈托なくさせる。ピリカネップの驛遞によつたら子供三人が三毛猫二匹と遊んでゐた。お茶をと云つたら、背戸で働いてゐたらしいかみさんが、愛想の好い無口で茶を汲んでくれた雌阿寒道を横目で見て通りすぎる。雄阿寒が一寸顔を出した。七曲りの下には白樺がすんなり陽を浴びて、にこやかに並らぶ。ヤマナラシがその側で絶え間なくうたをよむ。天候はどうやらとりなほしたらしい。折しもカラン〳〵と鈴の音がする。口にいれずみのメノコがひとり熊追の鈴つけて、馬にまたがり山を下りてくる。秋の阿寒道だよ。俺の心は俺に、つぶやく。追ふもの追はれるもの、お前等の境はない。時よ。やつぱりお前丈が確かだ。カラン〳〵鈴の音は遠くなる。いつかクエルクスの林に私達は入つた。山ははれる。雄阿寒の頂も直ちにはれるだらふ。道は大體雄阿寒川に沿ふて、いつとなくその山腹を僅かにのぼつて行く。雄阿寒は今晴れあがつた。急に山に出會つた心がせぬでもない。針葉樹の枯木を前にして、おほらかなその姿は、無性に私をよろこばした。リユツクサックを下して石に腰下せば、しらずしてきられるウ井スキーの口。さつとくる香りに唇をふるれば。又一杯。山に向へば山は一しきりウ井スキーを誘ふ。豊裕の俺の心。山見る俺の心。

雄阿寒を右にして、疎林の間高原を縫ふ。虫が澤山ないてゐる。ミヅナラの三四本の上を、ゆつくり白雲が走る、澄んだ悠暢の限りである。とある草原に下りて、仰むけにねると、うまい太陽が、頭も胸も一杯にさせてしまふ。一度やどり、又の日を思ひ來しこの高原。

湖が。青水晶の處女の姿を見る樣な心で。おゝたづねて來た湖が。お前の夢見る蒼い郷。そこには限りない希望とか

なしみにみちたよろこびが秘められてゐる。弦樂の數々、物語りの數々。その郷、夢見る郷、お前の日は今又お前に與へられるのだ。

二人はゆるい勾配を下りた。前の道らしい合致點で放牧の馬をつれ、銃をになふた人に出會ふ。湖畔の立木はキラリキラリミ眼光を放つてゐた。雄阿寒と叫びつゝ、ゆけば山浦は近かつた。三時に近い晴れあがつた湖畔の緣側に二人はわらじをときもせずじいつと湖に見入りながら辨當をひらいた。

阿寒の夕暮は好い。フツブシの肩に陽が沈むと雲は急に綾北見境の方に動いてゆく。凡木にしのびよる小波にも、おつとりした氣分が含まれて、遊ぶアイヌの子供がたまらなく可愛いものになる。雄阿寒の樹林が、藍青から黑紫に變る。すなどりする舟もあげられゝば、汀のいでゆの煙のみ白く殘つて湖に夜はくる。かくて橄欖の幻は空におどり、青銅の現は湖に沈む。

夜寒。釧路の奥のこの湖のほとりは九月になると急に寒さを身に覺ゆと云ふ。寢る前の風呂に入つた時、急にカニが北斗七星だと叫んだ。澄み切つた透明の殿にちりばめられた銀のS字形。うち見れば數限りなき星は、互の心をよろこびつゝ、この湖の憩に輝いた。汀には丸木があがつてゐる。湖畔のコタン二つ今は失せてゐる中老アイヌはこの夜を如何にすごすやら。フツブシ、雌阿寒、雄阿寒、知れる者の夜のさゝやき、傳說めいた物語りのみが生きて來る。

（九—九）

雄阿寒へ

湖畔—雄阿寒山頂　三里半

朝起きるとフツブシと雌阿寒が、薔薇の輝きにうき、靄湖面に低く這ひながら北見の峠に向ふ。晴れときまり相でも何だか雲のゆきゝが氣になる。

六時瀑口に舟をとく。雄阿寒の頂は雲に埋れてゐる。ボンモシリ、オンネモシリ、そしてボツケ。微風に心地よく甦りくる思出にカズ州、アメサンミ友達の名を口にしたくなつた。ふり仰げば雌阿寒山塊の頂は古代彫刻の姿を空においた。

六月には夢うつゝに山の息を交はせるシャクナギ、丈に近きもの多しといふ瀑口近く、細き水藻は透水にゆらぎ、ゆるかに青い坩堝の心が生きる。舟は銚子口に七時についた朝霧の中を、しつとりぬれながら、太郎口よりの瀧を見つ

丶登山火屋に急ぐ。清水澤の水はつめたい。「雄阿寒岳登山の方は此の清水で充分支度しなさい」の立札は氣に入つた。ウメバケモが流れのまゝに綠の呼吸をする。屈斜路への別れ道は近く、こんな日好には馬鹿に誘惑的だ。休み小屋も流れから半道はない。小屋に殆ど休みもせず、それからの巡視小屋もす通り。

雜木は僅かで、やがての針葉樹の枯木は小さいながら樺太の山をしのばせる。燒けた動物の骨格を野晒にした樣な感[illegible]細い針が胸をつく。[illegible]雄阿寒富士も加へて、細い溪の一[illegible]息がつまる

本さへ忽にせず悠容と迫る。湖は夢みる鄕、空の王子はそこに憩ふ。じゅんさい沼があさぎのしけみの間に、間近く指される。

木立へ。整調な樹木は雄阿寒の誇であり、雄阿寒持つ我等の誇りである。北の旅ならでは、北の山ならでは許されぬその雄雄しき哀律。威壓の中の軟き愛撫と謹しき執着、さみしさの底にたゆたういぶし銀のもだし。森の道は、こそばゆき彈力としめりをもつてゐた。そして風倒木の多い所には陽が笹に秋の透明さをたゝえさせ、ある所ではその上に樹影を紫黑におとさして、影と光の小人がつどひのよろこびに狂ふてゐた。ゆるい傾斜は雄阿寒の南面をめぐつてのぼる。

急なジグザクを切るとダケカンバの林だ。鈴振れば答へてくれ相な木々。私はじつと耳をすまして木膚によりそふたら、何かしらないが瞳がうるほふて來た。ハヒマツへ迄の道は知らぬ間に歩かせられる。そして明るみに出たかと思ふと、遺憾なき初秋の日和に、雄大とも壯大とも何とも形容の出來ない程な眺めがひろげられた。湖だ。

程見える。瞳が燃える。心が熱くなりだす。山よ。何と大きなその挨拶よ。心してみればありとあらゆる山々の曲線直線は、瑠璃ばりのホールにものしづかに今だまつて舞踊する。あまりに大きなその沈默よ。あまりに雄嚴なそのリズムよ。見える、無暗に見える。數へきれない程見える。だが、だが、こゝに至つて物狂はし迄に、物思はせる赤褐の殘骸。ハヒマツの燒趾。頂き……。眼を伏せる。燒趾、誰の罪？　追へばからまる誰の罪、おゝ、誰の罪でもないかも知れない此の衰滅。俺は誰も責めたくない。しかも俺は堰きあへぬかなしみを持ち、山一体の殘骸を歩いてゐると腹が立つて來る。でもやつぱりじつとすれば今となつて

は腹立ちより悲しみの方が大きかつた。物言はぬ山よ。物言はぬ丈に俺は一層しんみりさせられる。燒け殘りのガンカウランのしとねに晝飯を食ひ僅かのひまにもう一度山を見る。

三角點へ。雲が動いて來た。三角標丈がこはれかけて頂きに立つ。斜里岳、摩周近くのニシベツ、岩壁のカムイ、クツシャロを數へる。又此の面へかけての繁みもすてきだ、バンケ、ペンケ。霧は明滅する、たづね越し山の上。もう一度心から山に禮拜して、更にこの痛ましき山頂附近に、頭をうなだれてひざまづく。

札幌で私を心から迎へて下さる佐伯さんの一家、その亡くなられた父君の名は目標にかゝれてゐた。私は懷しかつた。ごこにもの姿、人生の淋しい子としての世の自分が、一寸もどる。さよなら、頂き。もう時間が私達には許されなかつた。お鉢平の底には、火がまはらず、イハギキヨウが咲いてゐたヲヤマリンドウが咲いてゐた。私は朗かな氣でこれを正視することが出來なかつた。燒趾は私にどこでも悲しい影をつくる。三時十分に晝食の所を發する。我慢したがしきれず、ダケカンバの林でついにシャツターをきる。針葉樹林は、行きより一層に紫の蔭を濃くしてゐた。大分下りてからの斜里はすばらしかつた。「雄阿寒の森林をとるんだよ」と云つて、カメラをむけたら、「森林かい」と言つて、カニがニヤ〳〵笑つてゐた。澄みきつた大氣の潮流は、今大地の淵によどみ、夕の琥珀を宿しそめた。ノートを二三ヶ所でした外は急いで下る。でも阿寒川の橋に來た時には、宵暗近くとなり、銚子口に着けば、雄阿寒は白き霧にすつかり埋れてゐた。

歸りは帆走。舟は輕やかに波をきつてゆく。夕暮はよい。星はフツブシにかゝる。「あらつ、お星！」。散歩の時、手稻の肩に急にキラリと光つた星を指した稚い春ちやんの瞳が浮ぶ。また一つ出た。ひつそりと照る。カニが「何だい」と言つたから、オリオンさと云つた。俺にはきれいな星はみんなオリオンである。

アイヌのすなどりしたカハチツブのさしみに、うまい夕飯についたのが七時半位だらう。腹がすいたから出鱈目に食つた。食後一日の疲れをいやしてくれるサイダーにさけこむウイスキー。胸も頭もスツとする。全部不足なし、云ふ所なし。

夜また風呂で北斗七星の銀のS字型を見、ねしなストーブの側に森林雜話をきく。（一〇——九）（續く）

彙報抄錄

一九二五年度全日本スキー聯盟會議

日程

第一日目　十月十七日東京市丸の内日本クラブに於て開催。

第二日目　十月十八日東京市京橋區宗十郎町聯盟本部に於て開催。

出席加盟團体

樺太中央スキークラブ　北海道帝大スキー部
札幌スキークラブ　小樽スキークラブ
小樽高商スキー部　三菱美唄スキークラブ
東北帝大スキー部　戸山學校スキー團
東京帝大スキー部　法政大學スキー部
早稲田大學スキー部　稲門スキークラブ
飯山スキークラブ　妙高スキークラブ
高田スキー團　長岡スキークラブ
京部帝大スキー部　○草津スキークラブ
○網走スキークラブ　○恭山スキークラブ

以上の如くにして○印の團体は新加入團体として承認せられたり。

協議決定事項

一、新加入團体承認の件

上述三團体加入承認は異議なく決定を見たり。

二、加入團体負擔金額の件、是は今年度は五〇名一團体金一〇圓、五〇名を增す毎に五圓宛負擔のことに決定せり、

三、競技方法及び競技規定制定の件、競技方法は從來までの地方團体的競技を廢し、個人競技に決定せり。競技規定は大項從來のものに從ひ、可成りの變更決定ありたり。是は後日聯盟本部より各地方團体に通知すると同時に公表する筈なり。

四、國際スキー聯盟加入の件、目下問合中につき報告のみにて終る。

五、聯盟豫算の件、特別會計、通常會計を審議し、次年度豫算の大項決定を見たり。

六、役員改選の件、前年度役員重任と決定せり。

七、スキー及スキー用具關稅輕減に關する件、異議なく政府當局に進言することに決定。

八、今年度全國スキー選手權大會開催に關する諸事項、

1. 競技開催地、樺太島豐原町郊外スキーケ丘。
2. 開催日時、明年二月六、七兩日。
3. 競技種目、

第一日目 {長距離競走——二五粁 / 短距離競走——一〇粁}

第二日目 {リレー競走——二四粁 / ジャムブ競技}

4. 競技委員は後日發表の筈。

九、本戰出場選手の爲めに、信越地方、關東地方、東北地方、北海道地方、樺太地方の適當なる有力團体に依頼し豫選競技開催決定せり。

H. U. S. V. 新着圖書

Merkbuch für Bergsteiger (1952)

〃 〃 Skiläufer. Henry Hoek

Der Ski (1925) s auf. Henry Hoek

Der Sprunglauf. Carl Hailer

S. S. V. Jahrbuch (1923) & (1924)

Der skilauf D.Carlsen

Jahrbuch v. d. Skiclub. Salzburg (1921)

Ski-chronik (1913)

以上最近松方三郎氏より寄贈を享けたるものなり。

尙外に木原均氏よりドイツの一九二六年の Sports & Körperkul tur

西岡一雄氏よりリュックサックの話の寄贈ありたり。

近代的二つのスキー權威書

廣田生

私がこんな見出しで書かうとする二つのスキー書とは一体何であるか、一体何處の國で如何なるスキー家によつて著されたるものであるか、夫は已に御持合せの人も少くあるまい。

一つは Schweiz の世界的一流スキーロイファとして知られて居る Hannes Schneider とスキー活動フィルムで我が國にも知る人の多い Arnold Fank の共著 „Wunder des Schneeschuhs" であり。他は同じく Hannes Schneider と、之もドイツに於て有名なる世界的スキーロイファ Devan

の共著になる „Moderne Schi-Sports" である。

私は敢て此處にこの二著を近代に於けるスキー書中の二大最高權威として推讃するに躊躇せぬものである。前者はスキー寫眞著と言つても良い位に豊富なスキーテクニックの寫眞が挿入してある、尚特に高速度にて撮影せるフィルム寫眞の二十數葉は、本文と相俟つて大なる特色を與へて居るものである。

寫眞は凡べて恐らく全日本のスキーロイファ、ベルグシュタイガアの尋く知るであらうスキーの驚異全三編を飾るフィルム中の粹を殆んど盡く複寫したるものと云ひ得べき鮮明なものである。本文は是を對照してスキーテヒニイクを系統的に説明して居る。而も附錄にかゝげらるゝシュナイダア氏のスキー指導課程は簡單ではあるが、ヅダルスキー以後の近代的スキー術を系統的にしたるものと云ふべく、異彩を放つものである。本著の本論はスキーの準備より始つてスキー附屬品についての指導研究、スキーテヒニイクの基本動作次いでシュヴング、スキーファレン、スキーシュヴングとシュネーミの關係、最後にゲレンデエラウフエンとゲレンデエ、シュプルングにまで及んで稿を結んで居り、所謂スキースポーツの領域の分は論述してない。此姉妹著ともなるべきものは後者の „Moderne Schi-Sports" である。

是は全く一般的スキーテヒニイクに觸れず專門的に所謂現代のスキースポーツのみの指導研究書である。是れには前者の如く鮮細なる而も美的寫眞は一葉も取り入れてはないが巧妙なる Julius Arato 氏の線畫は實に實物を髣髴たらしむるに充分にして、Thams. Bonna. Haug. Schneider. Helland. Schmid, Devan, Henriksen 等さてはノールウエー皇太子 Olaf 殿下のシュプルングスティルに到るまで世界的第一流シュプリンゲルを抽出せざるはなく、又ラングラウフに於ては Haug. Schneider. Schneeberger 等の走法の抽出は、まことに巧にして、原文と對照すれば、一々の是等スキーロイファの寫眞に接して居るが如き感じを自づと抱くのである。夫れ原文のシュプルングとラングラウフの系統的解説にあつては、懇切丁寧を極めたるものにして、著者等の拿い研究と体驗とは續む者をして感嘆の聲を發せしめずに置かないのである。尚冬季二ヶ月間に於ける系統的競技練習法の實際は千金を以てしても購ひ得ざる賜物であらう

英國の Arnold Lunn, H. Caulfierd 氏等の著、スキーインゲヤ、スキーイングターンも我等の手に入り易く、讀み易い

といふ點に於て、又彼等獨特の解說法に於て良著に相違ないが是等の著書を手にせずとも、前二著を有するならば、獨文を知らざるスキー家でも大いに滿足することが出來るであらう。まして獨文を讀破し得るロイファにあつては此上なき良著であらう。

更に若し吾々がノールウエーの Amundsen 氏の著 „Ski-löpning" を持ち合せ得るならば、遠き將來まで他に發行せらるるであらうスキー書を購ふ必要は恐らくなからう。勿論過去に發行せられて居る反古書は不要であらう。たゞこの „Ski-löpning" は原文がノールウエー語なるが故に一般には不向きではあるが、スキースポーツの歷史、スキー製作及びスキービンドウングの變遷、さてはスキースポーツのテヒニイク、スプルングシャンツエの設計等の貴重な資料は、卷中に挿入しある印畫によつて氷解することが出來るであらう。

歷史と金と時と人とに乏しい我が國に是等の足元にも及ばぬスキー書の余りに亂造さるゝことを悲しむ。

後記、私は未だ前二書は實のところ所々拾ひ讀みをしただけで始めから最後までは精讀して居りません。それ故或はこんな評をするのは間違つて居るかも知れませんが、若し私が夫れ等を精讀したなら、今私が記述しました事柄が余りに貧弱な評に終つて居たことを悟るかも知れません。事程左樣に私のこの記述は誇大でないことを確と信ずるに躊躇せぬものであります。(二五、一〇、五)

プツシゴ

○早稻田大學体育會スキー部では去る十月十八日より十月廿一日まで第一高等學院第十七、十八番教室に於てスキー展覽會開催せられたり。

○十月中旬過ぎに初雪を見たる北海道では各スキークラブは、一齊に今シーズンのプログラムを發表せり、何れも盛りたつぷり、シーズンに入らずしてシーズンに入りたる感あり。何れ全國の各スキークラブのプログラムも出揃ふなるべし。

○十月二十八日北海道帝大スキー部にては、今年の新入部員歡迎と暫く滯歐中なりしスキー部に關係深き成田教授の歸朝歡迎會を兼ねて盛大なる歡迎會を校内學生集會所にて開催せり。會するもの百數拾名なりき。尙十一月初旬には醫學部大講堂に於て同じく同部主催山岳、スキー幻燈寫眞會開催の豫定。

○來る十一月慶應体育會山岳部より「登高行」第六年田版ある

由目下豫約募集中。

○東京は運動の秋、美術の秋と言はるゝ十月の中旬、雨が降る雪が降る。北海道、樺太の氣候、今更乍ら日本の廣きを知る。

○全日本選手權大會開催樺太と決る。如何に何れの競技が威張つても全國の大會を堂々たる施設で樺太などへ持つて行けぬだらう。特殊スポーツとは云へ全國味たつぷりと言ふべし。

たゞ選手が集るかどうかは疑問であるが、たゞ遠方なるが故出場出來ぬと言ふは議論にならない。外國の大會に出場すると思へば本土あたりから樺太位まで出掛けることは朝飯前のことだ。さう屁理窟を言ひ合つて居る樣では日本のスキー界も前途遠しと言はねばならない。

○全國大會を三回とも經驗して居る人は、今度樺太へ出掛かけて始めて何處が大會に適するかを知ることが出來やう。

特殊スポーツの場所の偏倚は避くべからざることを知ると同時に、成るべく大會開催の諸條件に適合した場所を、今度樺太へ出かけてから、全國のスキーランナアは冷靜に判斷するが良からう百聞一見に如かずの機會は正にシーズンに入らんとする吾等の眼前に展開されてゐる。

○外國では盛んに立派なスキーと山に關する本が次から次へと出版せられて居る。おなじみのヘンリイヘイクの"Der Schi"でさへ一九二五年版として改訂第八版が出て居る。外國のランナアはそれだけ豐富な材料を持ち合せて居るんであらうか。出版の多寡必ずしもスポーツの隆盛と一般的たるを語るに足るまいが、兎に角吾々が毎度新に手にする外國の夫れは、何時も吾等の一歩先の途を歩いて居る樣だ。日本でも滅多に近頃亂發せらるゝキヲモノ的なスキー書の中に、清涼劑にもならうと云ふ位の權威あるものに筆を染めやうとする人はないか。往來の金井、山口兩氏のスキー書を見て今の世のスキーランナアに何れだけの進歩した鑑識が出來やうか。自分で書いたスキー書を自ら押賣りするに到つては言語同斷ぢやなからうか。スキー書の價値はスキーを穿いた經驗のある人にこそ判れ、始めてスキーをやらうとする人にはテンデ見當のつくものでない。始めて面白味を知つてスキーをやらうとする人を誤らせる樣なものを書くランナアの罪も決して輕くないと思ふ。暴言勘忍々々（君一）

大阪の小森氏からの玉稿を戴いて本號を飾ることの出來たことを深く感謝致します。（編者）

廣田戸七郎著

スキージャムピング

スキー競技に於て最も重要なジャムプの一切を解説せるものである。

四六判　一七五頁
定價　金壹圓

北海道帝國大學スキー部編纂

スキー術階梯

改訂第三版
四六判　一二〇頁
定價　金六拾錢

札幌　山とスキーの會　發行

優秀ナルスキート其用具

小樽

梅屋運動具店

ノールウエー式
スキー靴
札幌市南一条西三丁目
木本靴店

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川七一二四番

振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C. G. S. 系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定價 金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

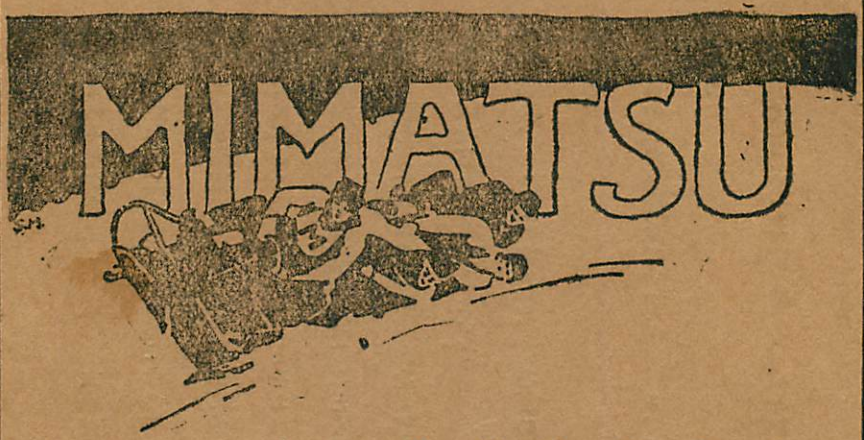
大正十四年十月三十日 印刷
大正十四年十一月一日 發行
（毎月一回一日發行）

編輯者 相川正義
印刷兼發行者 廣田戸七郎
札幌市北一條西二丁目
印刷所 札幌印刷株式會社
札幌市北六條西六丁目
發行所 山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No 54. Novembro 1925. Sapporo. Japanujo.

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
大正十四年十月三十日印刷納本
大正十四年十一月一日發行

The Leading Winter Sport House.



美滿津特製
慶大山岳部、學習院山岳部、早大スキー部
一高スキー部
帝大山岳、スキー部御用
スキー及びビンディング
ポップスレー
スレッデとトボーガン
スノーシュウ

冬期登山用具各種
ウキンター・キャンピング用具
フキギュア・ホッキー・スピード
スケート
アイス・ヤット等

合名會社
美滿津商店
東京・本郷・赤門前
電話(小石川)八四五・二〇七一

山とスキー 第五十四號
定價參拾錢